

とんびが鷹を生む

「蛙の子は蛙」といふ諺に対して、「とんびが鷹を生む」といふ諺もあります。それはどう考へたら良いものでせうか。それは「前者は世の普遍的な原則を言ったものであり、後者はその特殊な例外を言ったものである」と考へたら良いと思ひます。どんなに普遍的な原則でも例外の無い原則など無いからです。

それにしても、どんな場合に「とんびが鷹を生む」ものでせうか。それは「親が、子供の目の届く範囲においては、極力自重自戒して、立派なお手本を子供に見せるやう努力した場合」といふことが、先づ第一として考へられます。

9歳でライプチヒ大学に入学し、13歳には数学で博士号を取得し、15歳では法学博士になり、16歳でベルリン大学の教授になったカール・ヴィッテの両親の場合が、その典型的な例でせう。

しかしながら、あのやうな努力はとても普通の人間の出来ることでは無いでせう。だから「とんびが鷹を生む」といふことは例外中の例外だと言ふわけです。とは言つても、「わが子には親よりも立派な人間になってもらひたい」と願はない親はゐないし、さう願ふ以上はいささかなりともそのための努力をするのが親の務めといふものでせう。

さういふ中から、異常な努力をするカール・ヴィッテの両親のやうな親が現れて、それで「とんびが鷹を生む」といふ特殊な例外が実現するのでせう。

第二として考へられることは、「“反面教師”が成功した場合」です。子は幼いうちは、無批判に親のすることを真似するけれども、やがて親の批判が出来る能力をもつやうになります。さうなると、悪い親の醜い行為を見ても、自分はそのやうな醜い行為は絶対にしないぞと覚悟し、かつその努力をする者もあります。その場合に「とんびが鷹を生んだ」といふ結果になるでせう。